岳　7　月

宮坂静生推薦

竜宮に帰りそびれし鰹乾く　矢島　恵
黒揚羽こころは水に寄りやすし　久根美和子
礫刑のイエスの踏絵のつぺらぼう　金子圭子
太平洋両手ひろげて夏来る　石井紀美子
花冷や音溜めてゐる火焔土器　西牧千恵子
蔦の子の漣のごと鳴く立夏　柴野公子
卒寿にもある嗜みや桐の花　横地妙子
花冷や空気止まりてゐるやうな　山田勝文
生き足らぬとて夜濯の手を止めず　岩上諒磨
竹皮を脱ぐ病棟のラビリンス　竹内　薺
青蔦の礫刑のごと木を咥へ　髙田　実
まんぼうは綽然と乗り青葉潮　三村晶英

*

面白い人になりたしチューリップ　鏑木ひろこ
チーズ工房青芝に椅子飾り置き　上村敦子
皀角の咲いて憂ひを置きに行く　太田　薫

海原の似合ひすぎたる螢烏賊　西澤日出樹
食ふために何も食はざる修司の忌　草野薫子
遠足のスキャットるるる志高湖に　牧野眞知子
樹木葬の森に子のこゑこどもの日　千葉任子
反戦の声に振り向く桜花　市川静子
若者にピザの匂ひの夏来たる　真弓ぼたん
河川樹林魔窟のごとくして若葉　満田光生
山笑ふ魚は山でとると言ふ　岸元忠義
田が植わりじよんのび村に甘煮の香　米山節子
囀りや和平和平と聴き取りぬ　安部克詠
春炬燵猫の形の神奈川県　田中眞由美
雲のぼる峡の真中や桐の花　萩原博子
イザベラ・バードの下りし阿賀野川遠郭公　長谷川みきこ
王ケ鼻下に街の灯みどりの夜　小林茂昭
宇宙見る大パラボラと吾や夏　三輪晋一

新たなる半世紀へ —— 岳俳句七月

巻頭言　俳句は短い。季語も切字も定型のリズムも詩型が短いことで考えられた、いかに俳句を無限の幻想へ誘うかという仕掛けである。が、俳句の最大の課題は「類想」という曖昧さをいかに考えるかという一点にある。

上述の仕掛けは俳句表現の常に個人の初発の問題であり、俳句作りはこれらの仕掛けを駆使することから始まる。

しかし、「類想」はいわば、読み手という他者と深く関わる。類想に基づかない俳句は他者に理解されないであろう。問題は、「わかる」という共感の詩情の質の問題である。類想はどこまで許されるのかという俳句表現の習慣への見直しこそ常に問われなければいけないのではないか。

類想感を破る幻想への挑戦——竜宮に帰りそびれた鱞

竜宮に帰りそびれし鱞乾く　矢島　恵

水揚げされた魚市場の鱞あわれ。買い手がつかないで蝙蝠型の鱞が乾いている。尾に毒があり、煽るような泳ぎも意外性がある。竜宮へ行く途中に漁獲されたという想像も読み手を刺激する。水揚げは珍しいのであろうか。

黒揚羽こころは水に寄りやすし　久根美和子

水辺に来る黒揚羽。生きものは水がいのち。揚羽蝶はこの世あの世を取り持つ使いであるという幻想を持つ。詩情に透明感があり、やさしい佳吟である。

磔刑のイエスの踏絵のつぺらぼう　金子　圭子

踏まれ続けてメリハリが失せたものか。ことは信仰に関わる悲しみの極み。「のつぺらぼう」とはどれだけ身代わりになり、耐えてきたものか、計り知れない。感性鋭い、想像力が豊かな作者だけに一途な表現に真実味がある。

太平洋両手ひろげて夏来る　石井紀美子

雄大で明快な景。この大らかさにいかに人間の喜怒哀楽が交叉するのか、明治時代の子規一門の「写生」が始まった時のような明るさがある。令和の時代の混沌がこれから。期待。

花冷や音溜めてゐる火焔土器　西牧千恵子

花冷や空気止まりてゐるやうな　山田　勝文

「花冷」二句。両句とも花冷の静謐さを捉える。日常と隣り合う、僅か一皮剝がした初々しい領域へ感性を働かせている。縄文の火焔土器にいのちの音が溜まる。空気がひたと止まる真空に近い冷えの不思議。花の美しさへの共感である。

卒寿にもある嗜みや桐の花　横地　妙子

隅々まで張りつめた句。作者の老いの清々しさが漲る。石田波郷・斎藤玄門下の矜持が「嗜み」の配慮に生かされ、些末な句がないのが信条である。釧路にこの人あり。

生き足らぬとて夜濯の手を止めず　岩上　諒磨

「夜濯」という忘れられた生活感ある季語を掬い上げたのが三十代の青年とは感激この上ない。主人公は年配者か。他者への配慮という懐の広さを思わせる。

竹皮を脱ぐ病棟のラビリンス　竹内　薺

病棟の廊下には、検査室や病室への案内のルートが色とりどりに書かれている。「ラビリンス」とはそれ。窓から中庭の竹林の様子が見え、気持を殺した足早の動きが伝わる。巧みな作。

青蔦の磔刑のごと木を咥へ　髙田　実

名高い〈戦後の空へ青蔦死木の丈に充つ〉（原子公平）を思い出す。戦後八十年の経過が「死木」から「磔刑」へ。青蔦の勢いが伝わる。富山県井波の作者。木澤つとむともども健在なのが嬉しい。

今月の秀句

蔦の子の漣のごと鳴く立夏　柴野　公子

「岳」の花形であった柴陽花句会。六月六日、八八六回の句会には柴野公子の追悼句がどっと出された。過日、句会の長老宮地良彦先生を送り、ここに安曇野市三郷温の柴野公子の逝去に遇う。瑞々しい、とびきり愛らしい詩人であった。夫君の植物学者、亡き柴野武夫先生も抜群の人柄。「お来たか」と妻を迎えられたか。

掲句が最後の秀句。青空に蔦の子が漣たつ心地よい声を流している。かつてこの地は満々と水を湛えた湖。そんな古譚を蔦は熟知しているのか。安曇野に夏が来た。心に沁みる名句である。さよなら柴野公子。五月十八日、享年九十二。

まんぼうは綽然と乗り青葉潮　三村　晶英

「綽然」はゆったりと余裕あるさま。葉月の潮に乗り、まんぼうが揺り籠に揺られるように、ゆらゆらと。ドクトルまんぼうではないが、こせこせしないのがいい。作者は病が快癒されたものか。端然とされた「若葉」の貴公子。

河川敷に茂る樹林を魔窟とは——着眼・表現ともに秀でる

河川樹林魔窟のごとくして若葉　満田　光生

好調である。私は、多摩川の河川敷の鬱蒼たる樹林を俯瞰するたびに、むらむらと表現欲が湧く。上高地から流れ出す梓川の岸のにせアカシアの樹林を見ると、したたかさに感動する。光生の非凡な挑戦に大いに共感した。音楽もいいが手がつけられない身近な樹林詠に感銘する。長い作句修行を積み、蕪村全集の編者としても一流である。誠実一筋。硬い硬いといわれながら、硬さを生かした柔軟さを獲得した。スケールが大きい。「魔窟」とは、比喩が抜群に迫る。

チーズ工房青芝に椅子飾り置き　上村　敦子

さりげないお洒落が、軽井沢あたり、佐久の平にはある。雰囲気、気分がいい。清爽な気分を誘う俳句に惹かれる。さらにこの先を期待して。

皀角の咲いて憂ひを置きに行く　太田　薫

句中に「行動」がある。ともかく体を動かしてもやもやが纏わる身を少しでも強くしたい。この意志力から何かが始まる。ぱらぱら零れる皀角の落花を浴びながら。

海原の似合ひすぎたる螢烏賊　西澤日出樹

富山湾の螢烏賊。海原を背景に螢烏賊を掬っている句ではないか。獲れそうな予感がするのであろう。表現を一歩踏み出す。その工夫途上の句である。これで行きましょう。

食ふために何も食はざる修司の忌　草野　薫子

おいしいものを食べるために昼は控える。よくやることである。寺山修司忌は五月四日。昭和五十八（一九八三）年没。四十七歳。〈たんぽぽは地の糧詩人は不遇でよし〉（寺山修司）を思い出しながら、美意識の人一倍強烈であった寺山のことを思っている。作者も美意識を重視している。その掲句に注目した。

今月の秀句

面白い人になりたしチューリップ　鏑木ひろこ

過日、子どもの日に父親が子に「おもしろい人になれ」と言ったという句に出会い感動した。選をした句であったが、記録しておかなかったので、詳細は失念した。そして出会ったのが掲句である。願望を素直に表現している。チューリップからは直向きな願いが感じられる。

「面白い人」とは長い戦後を経た知恵が感じられる。お笑いではない。野球の大谷翔平でもない。お金持ちでも有名人でもない。早い話、人生、困った時になんとか窮地を切り抜け、笑いを絶やさない人か。これから出会う人にきっといるよ。

折から、辻桃子の訃報に接した。六月十一日逝去、八十歳。「鷹」時代に交流し、「岳」五周年大会などに参加して貰った。藤田湘子門下として名を成したが、不意に波多野爽波門へ移られ驚いた。津軽へ移住され、忙しくされていた。話題の人であったが、入門書ばかりでなく、骨ある書が欲しかった。

遠足のスキャットるるる志高湖に　牧野眞知子

快適な鼻歌交じり「るるる」。作者の故郷、大分市の高原志高湖への遠足。弾みが楽しく読み手に伝わる。

樹木葬の森に子のこゑこどもの日　千葉　任子

かつて一関市厳美町骨寺村の樹木葬の場に立った。東北勢と一緒の楽しい旅の思い出である。自然な森、樹木葬も自然。みちのくは生き方に作為がない。これが長い間の東北行の実感だ。掲句は樹木葬の森に子どもが集まる。死と生との違和感がない。地貌の空気が伝わる。骨太な句から作者の面影が浮かぶ。

反戦の声に振り向く桜花　市川　静子

北海道河西郡芽室町在住の作者の訃報を耳にしたのは六月六日、岡谷での諏訪四季句会の席上であった。どのような伝手があったのか、しばらく前から静子さんは諏訪四季句会に投句され、自由な作に句会が湧いた。それが、突然に五月二十八日、八十歳で逝去されたと伺い戸惑ったのである。ご冥福を祈る。

後からご主人に伺うと二年前に大腸癌の手術をされ、その後の余病によりいのちを縮められた模様。私の元には季節ごとに切絵が送られてきた。玄関に飾り楽しませて貰った。小学校の名物先生で、句稿の裏には感懐が縷々と記され、十勝の空気がびんびん伝わる。「反戦の声」は桜の声であり、静子先生の声であろう。お会いしたい北海道の俳人であった。

若者にピザの匂ひの夏来たる　真弓ぼたん

快活そのもの。ピザの夏こそ若者の天下。ぼたんの季節。とりわけ際立つ作ではないが、この類想との紙一重感を大事に、この先に何があるか、歩み出したい句である。

山笑ふ魚は山でとると言ふ　岸元　忠義

岩魚もやまめも渓流の魚。海では獲れない。真正面からこういわれると山もにっこり「山笑ふ」次第。

田が植わりじよんのび村に甘煮の香　米山　節子

柏崎市にあるゆったり温泉村。地名の面白さが句に民話風な物語を招く。田植が終わり骨休め。甘煮も適度な演出だ。

囀りや和平和平と聴き取りぬ　安部　克詠

求める思いが囀りにまでも聞こえる。「和平」がいい。

春炬燵猫の形の神奈川県　田中眞由美

地図を広げたものか。神奈川県への猫好きのエール。

雲のぼる峡の真中や桐の花　萩原　博子

初々しい。見上げる渓谷の真中に桐の花。構図に夢がある。

イザベラ・バードの下りし阿賀野川遠郭公　長谷川みきこ

一八七八（明治十一）年、イギリスの女性イザベラ・バードがみちのくから蝦夷、さらに新潟の阿賀野川下りを果たす。維新後初の日本探検記。国を知るのは戦争態勢と植民地支配と旅という。遠い地で鳴く郭公の声ほどに懐かしい紀行だ。

王ケ鼻下に街の灯みどりの夜　小林　茂昭

美ケ原高原の王ケ鼻の山頂から眼下の街の灯をみる。夏が始まる躍動感と旅愁。過ぎ行く時間をぴんぴんと感じながら、わが住む街への一期の思いに耽る。作者は米寿。

宇宙見る大パラボラと吾や夏　三輪　晋一

佐久市臼田宇宙空間観測所には日本一の直径六十四メートルのパラボラアンテナがある。それを見ただけの即吟であるが、「吾や夏」の表現に注目した。これがわが夏であるという感動が滲む。

他に推薦候補作を掲げる。

行く春を引き寄せて切る足の爪　依田　ひろ
研修医科の木の苗植ゑてをり　宮坂やよい
水軍の島や桜の汀まで　中村喜久恵
百千鳥煉瓦造りのピザの釜　比田井喜美子
涅槃雪千手もて受く大欅　後藤　冴子
逝く人の耳聡くなる巣箱掛け　穂苅　真泉
子を土に還す二十年新樹光　川阪　潤子
五月鯉未来無窮と思ひし日　松岡　節子
春筍やきのふの悔いを糧としつ　山田　千春